



Title	清少納言の精神機構：「翁丸」の鑑賞を中心として
Author(s)	林, 和比古
Citation	語文. 1951, 4, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68386
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

清少納言の精神機構

——「翁丸」の鑑賞を中心として——

林 和 比 古

一、喜劇か悲劇か

ようといふ感人の声もあつたが、天皇のお許しが出て翁丸はまた銅はれることになった。

長保二年（一六六〇）三月の中、下旬。場所は小一条院の仮宮。一条天皇の御寵愛になる猫に、お飼犬翁丸が猫がよりの乳母の元談を真にうけて噛みつかうとした。このため翁丸は天皇の御勘気をうけてどこかへ流された。三四日たってこの犬が宮中へまた帰つて来たので捕へられ、そして遂に撲殺されたと婢女が報せた。

その夕方泥まみれになり腫上った犬が来たので、翁丸かと女房

達は名をよんでもみたがぶり向きもしない。これは別の犬だと衆議

が決つた。その翌朝定子皇后の御側に侍つていると、昨夕の犬がみすぼらしく蹲つている。清少は「たうとう翁丸も殺されてしまつたわ。可哀さうに。こんどは何に生れ変つたことだらう。死ぬ時はどんな気持だつたらう」と独語すると、側に居た犬が、突然ふるひわなゝき涙を落す。清少はさてはと思つて、「それではやつぱりお前は翁丸だつたの？」といふと、犬は頭をたれてますます泣く。それから後宮は大騒ぎとなり、皇后はもちろん、天皇も女房達も集つてき、感心し笑ひさわいだ。中にはその犬を検分し

これが現行の枕草子第七段「うへにさぶらふ御猫は」の梗概である。この記事をどう解釈し鑑賞するかといふことが本稿の出発点であるが、それにはまづ

○作者清少がどんな態度でこれを録したか、単なる日記、雑録としてこれを草したか。

○われ／＼は如何にこれを鑑賞すればよいか。

右の二点を検討する必要がある。世には鑑賞の主觀性獨自性を主張する人があるが、誤った解釈の上に立つて、鑑賞の獨自性を主張するのはいはれなき事である。人間の心情は不思議なもので、解釈が完全に一致すると感受鑑賞もまた一致することが多いのである。

さて「翁丸」に対する從來の学者の鑑賞は必ずしも一致しないのである。主な説は次の通り。

(1) 平穏な平安朝の平板な出来事としたもの

枕草子選釈（佐々政一稿・山内二郎補）・犬が猫を追つて終に勅勘を蒙つたなどは左程大した出来事では無い。而してその痴者たる

翁丸が君の御咎を恐れ憚つて、我が名を隠し忍んだのを終に清少が見顧したといふ。これも左程の大事件とも思はれない。こんな些細な事が宮中の評判となり終に清少をして長文をものせしむるに至つたのを見ても、当時の宫廷生活がいかに平板なものであつたかと思ひやられるでは無いか。……此の「翁丸」の一段は波瀾に乏しい事件でその出来事も左程珍奇な事では無い。（傍点筆者以下同じ）

(2) 喜劇としたもの

日本古典読本枕草子（塩田良平）・之はあくまでも、長閑な喜劇でなければならぬ。主上も宮も右近も、勿論清少納言自身も翁丸の殊勝さに思はず笑ひくづれ、すべてが陰惨なものを吹きとばして、笑ひに落ちて行くところに、この作の眼目があることを知らねばならぬ。……この眞面目な愛すべき道化役者の翁丸をば是等の高貴な方々と共に微笑ましく見送つて、この枕草子の一巻を閉ぢることにしよう。

枕草子の精神と秋義（田中重太郎）・平和な宫廷生活の一日の話題となり、又行事となつたこの喜劇を、拙い秋義を終へる最後の段として説きたい。

(3) 単に宮中生活の一挿話としたもの

評註枕草子選釈（岸上慎二）・宮中生活の一挿話としてわれわれに見逃すことの出来ぬ名文とすべきである。……とにかく平安朝の一条天皇の大御代の事柄としてゆかしく思はれる段で、又筆者の清少納言の涙もろい性格も十分出でてゐる。

一挿話といふのでははつきりしないが、あまり重要でもない出来事といふ意味に解してよからう。

(4) 珍らしい犬猫の話としたもの

枕草紙抄（加藤磐齋）・猫犬などの事に付てことぐなるおもむきをいひ述たり。

旁註（岡西惟中）・是マデ犬猫などの上に聞みことなるものなり。（これらは今昔物語や靈異記にあるやうな異談珍説として翁丸の段をとりあげてゐるのである。）

以上の著書はともかく語句の註釈ばかりでなく、鑑賞の仕方、主題のありかを示してゐるのであるが、いづれも本段の特色は迫力ある心的内容を示すにありとせず、たゞ事實の描写に名文たる特質があると云ふのである。

此の書は一面から見て一條院の期における宮廷の巧妙なる活動写真とも見れば見らる。……若し凡筆を以てこれを叙したならば殆んど見るに堪へないであらう。（枕草子選釈）

そのさんざめきを終りの数行でキチンと聚めてゐる彼安の才筆も又思ふべしである。（日本古典読本枕草子）

(5) 次に私の考へ方を述べる。

- (a) 弱者翁丸が悲境に陥つて、いぢけ、頑になつてゐる。いつたんその境遇に他から間接にでも同情の寄せられたのを知ると、感激し、頑になつた心もくづをれて嗚咽にむせぶ。悲喜こもごも至る翁丸の激情が表はれてゐる。
- (b) 翁丸自身はその行動及び心理を自分で説明しないから、第三者には分らない。第三者はそれぞれ自己の心情傾向によつて各自の判断を下すわけである。清少は(a)の様に犬の心理行動を解釈し観照して文章にしたのである。清少ばかりでなく、その場に居た人々——定子皇后、女房達、そしておそらく一条天皇も清

少と同じ判断を下されたと考へられる。それらの人々は定子皇后の悲境に同情し、その気持を以て翁丸事件を観てゐるのである。

(c) 犬の事件をかく理解しない人々も宮廷には居た筈である。藏人忠隆もその一人であるが、かりに彰子中宮方の人達がこの事件を見たとしても、それほど身に沁みて感じなかつたであらう。

(d) 以上(a)(b)(c)のやうに事象を把握して清少はこの文章を草した。ゆゑにこの事件を喜劇とするか悲劇とするか、平板とするか深刻とするか、異談珍説とするか主体的心情表現の作品とするかで、作者清少の精神を理解する尺度となし得ると思ふ。

(註) ○池田龜鑑博士は枕草子評釈(雑誌「国文学解釈と鑑賞昭和二三年九・十一・十二月号)「あはれ」の語訳において、「畜生の身ながら、人の心を察して人間らしい行動をとった犬に対して清少納言が自らの全感情を移入し、その心境をのべてゐるのである。即ち犬の行動の中に、人間らしいものを見出して感動してゐるのである。」と説かれ、正に従ふべき解釈である。しかしにまた「をかし」の語訳で、「をかしは、犬の行動を知性に照して批判してゐる。何か古物語や古伝説などに見られさうな面白さを、この犬の行動に見出して、面白く感じてゐるのである。」と説かれ、これは(4)の異談珍説の立場である。清少が一方で、「温い同情心によつて犬のくづをれる激情」に陶酔しながら、他方で古伝説的面白さに興ずるといふ二重人格的心理からこの作品を草したと思へない。私の解釈では、「をかし」はこゝでは弱小な者の表はす可憐美を指すと解するのである。

末尾の「なほあはれがられてぶるひなき出でたりほどこそ云々」の条に示された同博士の解釈をも参照し、私の考へ方と同じでないと判断したのである。(本誌8頁参照)

○金子元臣翁の枕草子評釈は懇切詳細を極め、ことにこの事件と皇后の身上とを連関させた点で敬服される。しかし把握の中心に何か的外れなものを感じる。それは清少の心のとり方がわれわれとは異なるからである。

清少の才筆によって、千古の名犬となりおふせ、人口に膾炙されるやうになった。(枕草子評釈六二頁)

か程まで犬に同情したのは、清少の性格として、俊媚な猫などよりは、快活な犬の方を好んだ故もある。(同右)

金子翁の説、猫より犬を好んだ(前註)等といふ事は私には考へられない。清少にとっては猫でも犬でもよいのだ、名犬伝を書かうとしたのでもない。彼女は翁丸を普通の犬にすぎないと思つてゐたであらう。それが眼前に居るとも気づかなかつた人間から発せられた同情の言葉によつて、一個の畜生が涙を流し鳴いたといふ事において、彼女は自己の全心ををのゝかせた。「何とすばらしいことだらう!」と

清少は薄命者の美しさとか、小さな思ひやりの嬉しさとかいふやうな心的体験を始終経験してをり、かういう問題に沈潜してゐた女性であらう。それがたま／＼翁丸の行動によつて触発され、この文章に形象したのである。この点が文学作品としての枕草子の、この段で肝要な所であらうと思ふ。清少のさやうな精神を証明するものとしては次の段がある。

萬の事よりも情ある事は男は更也、女もこそめでたく覺ゆれ。なげの詞なれど、せちに心にふかく入らねど、いとほしき事を「い

とほし」とも、あはれなるをば「げに如何に思ふらん」などいひ

けるを、伝へて聞たるは、さに向ひてふよりも嬉し。いかで此人に思ひ知りけりとも見えにしかなと、常にこそ覺ゆれ。必思ふべき人訪ぶべき人は、さるべき事なればとりわかれしもせず。さもあるまじき人のきしいらへをも、心易くしたるは嬉しきわざ也。いと書き事なれど、更にえあらぬ事ぞかし。

大かた心よき人のまことにかどなからぬは、男も女もありがたき事なめり。又さる人も多かるべし。（春曙抄、岩波文庫版二三六段）

右の段を私の様に翁丸に結びつけて説いた人は未だ無いが、私はこの両段こそ具体的な事例と抽象的説明との関係に立つもので、その精神的基調は全く同一のものであると考へる。

田中重太郎氏は、「思ふに清女は猫よりも、犬をその性格的には愛したであらう。そして、この一段に見える翁丸に対する彼女のこまやかな心は彼女の女性としてのやさしさを十分教へてくれる。あの「よろづの事よりも人は情あること」といったこの冊子の作者の本音を。」——枕草子評解七六頁——と述べられたが、この説明では翁丸との直接的関係を指されたとは見られない。

「万の事よりも情ある事は」の段では「伝へて聞きたるはさに向ひてふよりも嬉し」とあるに反し、翁丸では清少が犬にさに向つて詞をかけた様に見えて矛盾の様であるが、実はさに向つてゐたのは翁丸ならぬ他の犬であると清少は思つてゐたのであり、翁丸も「死にけむこそ悲しけれ。何の身にか此のたびはなりぬらむ。いかにわびしき心地しけむ」と言つた清少の詞を、自分に直接向けられたものとして聞いたのでなくて、清少の独語を傍聴したといふ関係

にあるのであって少しも齟齬しない。

清少が腫れ汚ねる犬を翁丸だと知りながら、わざと知らない顔をしてゐたといふ解には従ひ難い。全く翁丸ではないとその時は思つてゐたのである。但し右近内侍の心事だけは不明としておく。

「万の事よりも」の末尾の「大かた心よき人のまことにかどなからぬは、男も女もありがたき事なめり。又さる人も多かるべし」は異解の多いところであり、翁丸に關係のない文意のやうであるが、私解によれば、「眞実心と才能の両方を併せた人間は少い。眞実心があるかと思ふとどこか愚直なところがあつて生存競争におくれがちである。（大進生昌を見よ、そして翁丸を見よ）また此世で幸運してゆく人はとかく明哲保身、我利々々の冷血漢である。（酒々たる宮廷社会の男女を見よ）あゝ眞実心と才能の両方を併せた人は少ないものだらうか。この宮廷社会には見当らぬ様である。しかしながら美しい人間のある社会もどこかにはあるのであらう」と解せられて、やはり無関係の事でない。

一、「かゝる心

諸先学が翁丸の段をかやうに理解したか否かは語句の註解だけの著述では分らない場合が多い。しかし語句の註解を通して、その理解の深さをうかゞべる場合がある。次に一つの問題を提出しよう。
○一条天皇のお詞に「あさましら、犬などもかゝる心あるものなりけり」とお笑ひになるところがある。かゝる心とはどんな心をお指しになつたか。

右に対する諸説を分類すると次の通りになる。
(1) 初めはおそれ、今はかなしむ心を指すとするもの

春曙抄(季吟)・集註(閑根正直)・評釈(池田亀鑑、春曙抄をひき、その後で、文意「おどるいたね、犬などもこんな人間のやうな氣持があるものだつたねとお笑ひになる」と附加せられた)等。

(2)勅勘を蒙つた為かくれしのび深く畏りたる心、(またはそれに近似の心)を指すとするもの

通釈(武藤元信)・選釈(佐々政一稿、山内二郎補、かく勅勘を蒙つたが為に、我が種性を隠し世を恐れて憚るといふ考)・新釈(水井一孝)・全釈(栗原武一郎)等

(3)勅勘を憚る心を指すとするもの

評釈(金子元臣、驚くやうに、犬などでもこんな勅勘を憚る心は持つてゐるものであるよ)・精神と現義(田中重太郎)・選釈(岸上慎二)等

(4)身の上をくらまさうとする心を指すとするもの

校註枕草子(吉沢義則)

(5)前述のやうな本段の理解から私の解答は次の様になる。

弱少なものの逆境に陥つて依怙地になつてゐた心が、他人の親切にふれて突然ほとび、嗚咽にむせぶといふ心を指す。

春曙抄の説は近いが中心をとらへてゐない。また勅勘を憚るとか謹慎する心とかはあまりにも形式的皮膚的である。天皇が直接かゝる心と言はれたのか、或はもつと具体的に「人の親切が分つて、感激するやうな心」などと具体的に言はれたのを、清少がかゝると簡約したのか、それは何れとも分らないが、少くとも清少の解釈した天皇の心は右に述べた通りでなければならない。また歴史的事実としても、天皇の御心は、清少の解釈したのと同じであらうと思はれる。

次に、一千年前の犬の心が果して勅勘を憚ることなどでなくして、親切にくづをれて泣き出す心であつたと断じ得るか?と反問する余地があるかも知れない。栗原氏曰く

あまりの折鐘に翁丸は極度に人間を怖れた。すべての人間が自分を振るわけに行かなかつた。今やつと女房たちに害心のないのが分つて来た。そこでひれ伏して甘えたものであらう。しかしきう底を割つては味も素氣もない。やはり勅勘を憚つたものとしておかねばならぬ。(全釈「今ぞ立ちちうごく」の解)

「勅勘を憚る」といふことに何かそぐはぬものを感じながら、あまり本当を云ふのは味も素氣もないと云はれるが、「私は勅勘を憚る」と解する事こそ太段を味も素氣もなくするものだと思ふ。季吟は勅勘などと考へてゐないが、武藤翁あたりから勅勘を憚るといふ考にとらはれ、多くの学者がこれを踏襲してゐる。栗原氏は動物心理学的に、その時の犬の心はどうであつたかを云ふ點でゐるが、それはこゝでは第一の問題でない。肝要な事は動物の心を清少が如何に解釈したか、動物を通じて彼女の心情が如何に表現されてゐるかである。

「かゝる心」を私の様に解した人はいまだ管見に入らない。これは「翁丸」全章に対する諸学者の根本的把握が、如何にいゝかげんで的外れであるかを示す一証であると思はれる。

三、私解三題

文意の理解は個々の語句の意味を基にすること勿論であるが、同時に個々の語句の意味内容は全文意によって規制される。翁丸の段

全体の意味及び主題のあり方を前述の様に理解した本稿においては、「かゝる心」の場合の如く、語句の意味内容のとり方を他の研究家とは異にしなければならぬものが二三にとゞまらぬ。こゝではその最も著しい三ヶ条をあげて批判を受けよう。

第一
○つひにこれをいひあらはしつることなど笑ふに（三巻本、朝日古

典全書枕草子による）

○つひにいひあらはしつるなど笑はせ給ふに（春曙抄）
○これをついてにいひあらはしつるなど笑はせ給ふに（伝能因本、吉沢氏「校註枕草子」底本十二行古活字本による）

(A) この語句の発言者は誰か。

(1) 天皇とする説（鑒齋抄）

(2) 皇后とする説（春曙抄以下）

(3) 清少とする説（武藤、永井、栗原、池田、吉沢諸氏）

(4) 女房とする説（田中氏）

「給ふ」のある伝能因本、春曙抄本に従へば、(1)か(2)になり、三巻本をとれば(3)か(4)にならねばならぬ。

(B) 何を「いひあらはし」たか

(5) 翁丸が可哀相だとの気持（田中氏、全書・精神と釈義・評解）

(6) この犬が翁丸であること（武藤氏以下）

(7) 清少か（諸説、大体これ以外にはない）

(8) 翁丸自身か（これもなか／＼面白い考へであるが、この説の人は無い）

(7)(8)の何れでも、私の以下の考へ方に矛盾しないが、まづ(7)の

(D) 方をとつておく。
「いひあらはし」た内容を誰が今まで置してゐたか
(9) 清少か
(10) 女房か

(11) 犬か

もし清少が置してゐたとすれば、清少は腫れ汚げなる犬を翁丸だと知つてゐたことになり、それでは、「さはこれ翁丸にこそありけれ、よべは隠れ忍びてあるなりけりとあはれにてをかしき」と限なし。御鏡をもうちおきて『さは翁丸』と言ふに」の感動は全く作為の狂言になつて、この段全体がぶちこはざれてしまふ。こゝは昨夕の女房評定で、翁丸でないといふことになり、清少もだいたいさう思つてゐた。その犬があるひわなゝいたので、「やはり翁丸だったのか！」と本心から感動するので意味がある。前から知つてゐたのではこの感動はおこらない。金子、栗原、池田、吉沢の諸先生がこの解をとられることは私の理解に苦しむ所である。かくしてゐたのは「犬」自身でなければならぬ。つまり頑にそっぽをむいてゐた態度を「かくしてゐた」と清少が解説したのである。

以上の諸要因を矛盾なく説いたものは現代の著書はないのである。私解によれば、「あんなに名を呼ばれても犬が依怙地に知らぬ顔をしてゐたのに(11)、親切心を以て清少納言が(7)、翁丸だといふことを(6)、いひあらあしてしまったのね、まあしばらくいぢやないと皇后さまは(2)、うれしさうにおっしゃつた。

(2の6の7の11)

皇后か天皇かは決定的には決められないが、清少との間柄から考

へ、彼女の真心をよく知つてをられる皇后とする方がよりよいであらう。

この文の先行句に異文あり、「つひにこれを……(三巻本)、つひに……(春曙抄)、これをついてに(十二行古活字本)」は伝能因本

をとれば吉沢博士の「これをきつかけに」に従ひたい。即ち「顔

がはれた様だ」とか「何か手当をしてやらうか」などとガヤ／＼

清少や女房達の評定の初つたこれをきつかけに、初めて皇后さま

が「いひあらはしつること!」と深い感動のお詞をもられた。

解説が簡単なために後の学者は見のがしてしまつたが、季吟はこの

部分に関する限り私説と矛盾しない。

○中宮御詞、翁丸といひあらはしたると也(春曙抄)

盤斎抄でもまだそれほど見当ちがひではないがこの解に関する限り

後世になるほど誤った方向へ進んでしまつたと言はざるを得ない。

第二

○なほあはれがられてふるひなき出でたりしこそよに知らずをかし

くあはれなりしか(三巻本)

○なほあはれがられてふるひなき出でたりしほどこそよにしらずを

かしくあはれなりしか(春曙抄)

○なほあはれがられてふるひ鳴きいでたりし程こそよそしらずをか

しくあはれなりしか(十二行古活字本、よそはよにの誤字と考へ

る)

企意のとり方に二種ある。

①鏡を持って皇后に伺候してゐた清少の前で翁丸がふるひ泣き出し

た時の事を回想してゐるところとする説(佐々・永井・金子・田

中・池田諸氏)

(2)鏡を持つて伺候してゐる清少の前で翁丸がふるひ泣き出した事件とは別に、翁丸なことが全部の人々に分つた後、またあはれがられて再び翁丸がふるひ泣き、御前を退出した事件があつたとする

説(春曙抄?・武藤・岸上?・池田諸氏)

〔註〕?印は明らかではないが、解説から、(2)の説らしく思はれるもの

○池田博士は伝能因本に「ほど」の語あるにより、その日の出来事でなければならぬとして(1)の解釈をとられながら、「なほ」

が「をかしくあはれなりしか」を修飾する点に無理があるとして別解(2)を立てられる。しかし(1)と(2)は矛盾する事実であるか

ら二者その一を選ばねばならぬ。それに対し同博士は解釈を与へられなかつた。

一度清少の前で泣いた翁丸が、もいちど皆からあはれがられる再びふるひなき、勅勸もとけ、人々の感心する中を退出して行つた。その事に清少がまたとなく感動したとするならば、何といふ気のぬけた茶番劇だらう。一度と二度の差にすぎないが、二度の方に感動する清少であつたら枕草子は書けなかつただらう。清少も決して二度泣いたとは言はない。たゞ「いまぞたちうごく」と言つただけ。尻尾をふりクリンクリン言ひながら、あちこち動いたのであらう。之はどうしても(1)の方でなければならぬ。たゞ(1)とすると池田博士の云はれたように、なほが邪魔になる。このなほのため諸家は(2)の説を立てるに至つたのであらう。

これを解決しなければならない。

○なほの意味用法の吟味

なほはどの語を修飾するか

(1) 「あはれがられて」を修飾するといふ説

磐齋抄（猶あはれがられとは初より一入あはれみをかうむる也。）

（傍点筆者）

武藤翁（翁丸が勧められて後猶人にはれがられて、いかに感じん。傍点筆者）

(2) 「をかしくあはれなりしか」を修飾するといふ説

選択（佐々政一稿・山内二郎補、猶、下のをかしくあはれなり

しかへ続けて解釈すべきである）

永井氏（今想つて見ても矢張り世に類なく面白く哀れであつた。なほ、「をかしくあはれなりしか」にかかる副詞）

金子氏（なほ。下の「をかしくあはれなりしか」に係る副詞）

栗原氏（なほ。下の「をかしくあはれなりしか」にかかる）

池田氏、（なほを強ひて解釈するなら「をかしくあはれなりしか」を修飾するものと見なければならぬだらう。）

(3) 「ふるひなき出でたりし」を修飾するといふ説

池田氏（評説）

氏は(2)の解を試みながら、なほ落着きかねて、更に別解を示された。

「なほ」といふ副詞は三巻本にも能因本にも共通するから原本のものであつたと見なければならぬ。が、やゝ不自然であり強ひて解釈するなら「をかしくあはれなりしか」を修飾するものと見なければならぬだらう。しかし当時の文章としてはかに從ふわけにゆかない。

(4) 以上の(1)(2)(3)の何れに属するか不明の説

岸上氏（まだ（人々に）可哀さうがられて……）。内海氏（なほ「後になつてもなほ」）。田中氏（それにしても（私に）同情の言葉をかけられて、身をふるはせて啼き出した時こそ、…）

田中氏の説かれる「それにしても」は整い接続を示す様な使い方だと解し得るが、この場合現代語にならあてはまるであらう。

しかし当時の文章としてはかに從ふわけにゆかない。

(5) 筆者は本段の趣旨に則して次の様に考へる。

他人から同情の調をかけられると、あんなに依怙地にそっぽをむいてゐた犬でもやはり身をふるはして泣き出した。その時こそ（あんなに頑になつてゐてもやはり情にはほどだされることがあると見えて）まことに可憐でもあり可哀相でもあつた。即ちなほは「ふるひなき出でたりし」にかかる、(2)の中へはいるが、池田博士とは全くその意味を異にするわけである。

か。即ち勧めがられたので、人々からふびんがられて、前と同じ様に身ぶるひをし、なきながら御前を退下して出て行つたその犬の後ろすがたをあらためて「をかしくあはれ」なるものと見たといふのではないか。（傍点筆者）

池田博士は犬が「ふるひなく」といふ事実が二度あり、なほはその二度目なることを示す副詞と解せられて、前と同じ様にと訳され、「ふるひなきいで」を修飾すると考へられたのであらう。ふるひなきが二度あつたとすることに対しては前に反対した通りである。「なきいで」のいでの退出と解するよりはもつと自然な「泣き始めた」と解することの妥当なことについては次の私説において述べるであらう。

私の解するなほの意味及び用法は、当時のものとしては最もありふれたものである。大言海なほ「直ノ義、其事ヲ曲ゲズシテ、本ノマヌナル意」（一）ソレデモ。ヤハリ「あはれがられて、なほふるひなきいでたりしほどこそ、世にしらずをかしくあはれなりしか」とあるべきものだが、なほに強調があるため、文初に出たまでである。

「泣きいでたりし」のいでに池田氏は困られて「退ド」とされたが、犬が泣くまいとじつところへにこらへてゐたが、清少の一言で我慢できなくなつて、たうとう泣き出したのであるから、「泣きいで」が生きてくる。「なきいで」でなくてはならない。「なきしほどこそ」では力が抜けてしまふ。

三

○人々にも言はれて泣きなどす（十二行古活字本）

○人々にもいはれてなきなどす（春暁抄）

○人などこそ人にいはれてなきなどすれ（三巻本）

(1) 異談珍説の見地からこの語句を解したもの

簪齋抄（人々にもとは、逸物なればこそ人々にもいひはやされてあれと地の詞也。又云、けだものなれどもすぐれたる心ある故に後迄も人々にいひ出しあはれしらおもはれんと也、おるかなる人にあたりたる下の心あるべし。）

旁註（岡西惟中。人々モカハニヤヘト云也。是マデ犬猫などの上ニ聞みよことなるものなり）

全く頓珍漢な解釈といふべきである。

(2) 清少が犬に同情した時このとを、後になつて人々から話の種に言ひ出され、また思ひ出して清少が泣くと解したもの

季吟・金子氏・吉沢博士（その当時のことを清少自身と云ひで、また人々にいひ出されて泣いたりする）しかし、この説の疑昧さについては江戸時代に既に疑問が出され、トイハレテ犬の意ニモ感シテナキナトスルヘシ。季吟ノ説イカ。

（傍点筆者）

全体の意味としては正しく、その点で次の(3)に入れてもよいが、たゞ保孝の解は「人々にもいはれてなきなどす」の語句の正しい解の上に立つての解釈でなく（彼は、「人々にいはれて」「犬ノ心ニ人々ニアハレカラル、ウハサヲイハレテ。「なきなどす」—犬ノ意ニモ感シテナキナトスルヨ。と解してゐる。かくこの語句においては「なきなどす」の主体は直接には「人」でなくてはならぬ。つまり保孝は語句の倫理的な解釈の自覚からでなく、云はゞて推量で「犬が泣く」としてゐるにすぎないのである。意味構成が誤であるから(3)には入れられない。彼自身もそれを感じてか「……ナルヘシ」と自信のない言ひ方をしてゐる）事件全体の見通しから、かうであらうと推定したのであり、たまたまその推定が当つたまでである。

(3) この語句の解は関根博士に至つて正解に達した。そのためには千蔭の対校した古本（多分三巻本であらう。千蔭の対校本については筆者未見）を参考せられることが必要であったわけである。

集註（関根正直）。春暁本には「人々にもいはれてなきなどす」とありて、註に哀なりし事を人にいはれて、清少のなく由に解かれたる、本文と共に註も譲れり。余が所藏の慶安二年版行の素本には、「人々にいはれてなきなどすれ」とあり。之を千蔭

は古本に校へて、上方を「人などこそ人にいはれて云々」と訂したり。(末は古本も素本も同じことなり)かくありてこそよく聞えたれ。その意は人間こそ他人に憐みいはれて、泣きなどはすれ。畜類はいかでできる事あらんと思ひたるに、実にも、主上の宣給へる如く犬だにかゝる心あるものなりけり、との意を含めたるなり。

私の解く本段の趣旨から言へば、どうしてもこの説の通りでなければならぬ。

【註】島津博士も自分の愛犬の経験からこの解に達せられ、泣くのは清少でなく、犬のことでなければならぬ。その方がずっと面白

いと思ふと述べられた。(鎌倉つれづれ草二三一頁)

明治四十年九月に出た武藤元信翁の通釈には「他よりさる事をいはれては、人ならば、往事を思ひ出して泣きなどすべけれど、犬はさる事もあるまじく思ひしに、今は犬もしかりと也」傍点筆者一とあって、(3)の説に似てるやうであるが、傍点の部分が誤であり、これは(2)と(3)の混合説の如きものである。従つて閑根博士を正解第一人者とするわけである。

閑根博士は三巻本の本文を是なりとして採用され、正しい意味を開陳された。私も全く同感であり、現代諸家もそれに従ふ人が多いわけである。しかし古活字本や春曙抄の本文の如き伝能因本系の本文を閑根博士のやうに、誤として簡単に捨て去れるであらうか。

閑根博士は、○人などこそ人にいはれてなきなどはすれ(三巻本)▽○人々にいはれてなきなどはすれ(慶安三年素本、私の調査によれば「人々にも……」となつてゐた)▽○人々にもいはれてなきなどす(十二行古活字本、春曙抄本)と考へられるやうであ

る。但し A ∨ B は B よりも A が正しき形の意味。それの方がすよりも条件句としては適当であり、その点から慶安三年素本の方が古活字本よりも原形に近いと考へられた。

世の研究家に二傾向ある。三巻本は伝能因本に比してよく分るところが多い。この合理的なところを以て三巻本を原本に近いとする人と、わからない点の多いこと不合理の点の多いことで伝能因本が原本の姿を残すこと多しとする人である。金子、池田、吉沢、坂元三郎(枕草子の疑義少々)の諸氏は後者である。

○この部分だけは(人々にもいはれての所)三巻本の方が通じやすいうが、それだけに追記の疑ひが生じないでもない(池田博士)○人々にも言はれて泣きなどす……「その当時のことを清少自身と云ひいで、また人々にいひ出されて泣いたりする」と积くべきものであらう。(吉沢博士)

吉沢博士が校註枕草子の底本に、春曙抄、通釈等をとらず、註釈上難点の多い十二行古活字本をとられた趣旨を、註釈上難点の多いといふことは人手が加はつてゐない點と見てよい場合が多いやうである(校註枕草子、校訂について)と述べられてゐるが、私も伝能因本にひかれることが多い。こゝでも伝能因本の「人々にもいはれてなきなどす」をむげに捨てられないから、この形を吟味してみる。すると次の二つの考へ方が生ずる。

(1)「人々にもいはれてなきなどす」(伝能因本)の形が原本の姿であるが、それでは人に十分理解できないので、「人などこそ人にいはれて云々」(三巻本)の形が、原著者又は後人の手によって出来た。

「不合理な語句→合理的な語句」といふことは考へられることで

(註)「男はめおやなくなりて」の段は私見よつて除外する。之については別の機会にのべる。

池田博士の分類の第三類に属するものを二つに分け、「正月一日は」、「春は」などは天然現象又は客觀物に関するものとして第一類に入れてA類とし、「五六月の夕つかた」「七月ばかりに風いたう吹きて」などを自然又は人生の感想に関するものとして第四類に入れてC類とすれば、第三類は削除して全体をA B C Dの四類に分けることが出来る。

(註)前田家本の分類を原著者のものでなく後人のものと見る。従つて筆者の如きA B C D四類別も許されるであらう。

また枕草子の多くの文章の冒頭にかゝげられた「日は」「物語は」「めでたきもの」「あはれるるもの」などの題となる詞を題詞と呼ぶならば(これを枕詞 枕などと呼ぶ人もあるが、枕草子における「枕」に就ては学説が一定しないから、しばらく之を避けることにす)次のことが言へる。

A 題詞あり。題詞の末尾「は」

B 題詞あり。題詞の末尾「もの」

C 題詞なし。

D 題詞なし。
いまB類を吟味してみると、

うつくしきもの(題詞)

尼にそぎたる児の、目に髪のおぼひたるを、
かきはやらで、うち傾きて物など見る、
いとうづくし。(心情詞)(春曙抄岩波文庫版一三六段)

(以下文例番号は春曙抄岩波文庫版による)

「うつくしきもの」は題詞であり、後の「いとうづくし」は素材となつた事物現象に対する著者の感想心情を表示したものであるから、かりに心情詞と呼ぶことにする。B類の題詞はこの心情詞に「もの」をつけるにすぎない。B類の文章には心情詞が文中、文末に存する場合が多い。

C類は題詞はないが、心情詞は殆どすべての場合に見られる。例へば

○五六月の夕かた、青き草を細ううるはしく切りて、赤衣着たるこちどの、小さき笠をきて、左右にいと多く持ち行こそ、すずろにをかしけれ。(二二六)

「をかしけれ」は右のべた心情詞であるが、この文には題詞がない。しかし、心情詞から題詞「をかしきもの」を作ることは容易であり、もし之を文頭に置けば、これ即ち、B類に転ずることになる。要するにB類とC類は根本的に見て同性質の文章である。

次にD類の文章は題詞もなく、心情詞も容易に見当らず、その点C類とは異なるのであり、諸家によつて宮廷雑記とか身辺日記とか云はれる所以である。「翁丸」がこの類に属すること、また諸家の一致して説くところである。しかし私は之を単なる雑記と見ず、「弱きものゝ頑なさが温き心によつてほとびる時の悲喜の感情」を主題にした作品と観、清少の心情的把握によつて統一されてゐる文学作品と観ることは前述した通りである。即ち清少の主情をかし、あはれ、又はあさましによつて貫かれてゐる。これらの語が即ちこの段の心情詞である。さう知つてこの段を読むと

○此のね(ゐナラン)たる犬、ふるひわなよきて、涙をただ落しに落す。いとあさまし。さはこれ、翁丸にこそありけれ。よべは隱

れ忍びてあるなりけりと、あはれにて、をかしきこと限なし。：

○なほあはれがられて、ふるひ啼き出でたりし程こそ、世に知らず、
をかしくあはれなりしが。

あはれ、をかし、あさまし（註）などの詞が作者の感情を表はすものとして目につく。

（註）「あさまし」善惡何れの方にも、あきれる位、ぞつとするほど、甚しきことを言ひ、枕草子「あさましきもの」の条では悪い方の甚しきことに用ひられてゐるが、この「あさまし」はよい方に用ひられた場合である。源氏桐壺「かゝる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましまで目を驚かし給ふ」枕草子、めでたきもの「蔵人になりぬれば、之もいはずぞあさましくめでたきや」の類である。

この心情詞から題詞「あさましきもの」又は「をかしきもの」「あはれるもの」を作れば容易にB類にも転せしめ得るのである。

春暦抄二一「すさまじきもの」（B類）の構造を吟味するに

すさまじきもの

……題詞

賜はりて云々

いとをかしく、あはれなり

……心情詞

昼ほゆる犬

……題詞

あさましきもの（れなるもの）「あは」

……題詞

ひとの情に感ずる犬
うへにさぶらふ御猫は、かうぶり

……素材詞
……説明詞

春の網代
三四月の紅梅のきぬ

……題詞

除目につかき得ぬ人の家

……題詞

今年は必ずと聞きてはやう

……題詞

ありし者どもの、ほか／＼なりつる

……題詞

云々

いみじういとほしう、すさまじげなり……心情詞

即ちこの文章の根本的構造は題詞、素材詞、説明詞、心情詞から成立ち、素材詞、説明詞、心情詞の三つが説明の部を構成してゐる。

清少はいくつかの素材詞を天来の金玉のやうに羅列するかと思ふと、突然特定の素材について縷々と説明を試みことがある。

この説明に盛られた内容は彼女が体験した事件である。「除目に司得ぬ人の家」の様子は父元輔の身の上そのまゝであらう。もしこの題詞及び素材詞がなく、説明詞だけが孤立したとすれば、それはとりもなほさずD類の文章になるわけである。反対に「翁丸」の条に題詞及び素材詞がついて次の様にでもなれば、即ちB類に列せられるわけである。

D類の諸作品を鑑賞するに当つては、その文章の底を流れる清少の主情をとらへ、この主情によつてその文意を統一把握することの必要な理由が分明になつたであらう。この主情を把握しなければ、所謂平板無味なる雑記となりなり、単に史的資料としての価値しか発見出来ぬことになる。

最後にA類について吟味しなければならぬ。これはBCDの三類と異つてある様に見えるが、根本的の構造は異つてゐないのである。

○淵は。

かしこ淵。

いかなる底の心を見て

さる名をつきけむと。

いとをかし。

いとをかし。

…………題詞
…………素材詞
…………心情詞
…………説明詞

(5) 素材詞、心情詞を缺いたもの
○五月五日は（題詞）雲りくらしたる（説明詞）——八一
(6) 素材詞を缺いたもの

○修法は（題詞）仮眼真言などよみたてまつりたる（説明詞）な
まめかしらたふとし（心情詞）

一一〇二一

すなわち題詞、説明の二部より成り、説明が素材詞、説明詞、心情

詞の三部分に分たれる。これB類と根本的には構造が一致するわけ

である。A類は題詞を缺くことはないが、たゞ素材詞、説明詞、心

情詞がある場合にはその一を缺き、ある場合にはその二を缺くた

めに、この類は六種に細分類せられるのである。（分類表参照）

(1) は説明詞、心情詞を缺いたもの。(2) は分類表の種類を

示す。以下同じ)

○海は。水うみ。(十六)

○山は。小倉山。三笠山。このくれ山。わすれ山。(十一)

「海は」、「山は」が題詞であり、その下に続く説明の部としては、たゞ素材詞の羅列があるばかり。これが枕草子に非常に多い。興味あるところには、かやうな素材詞をおしわけて、説明詞や心情詞が湧出することがある。

(2) 説明詞の添うたもの

○春は（題詞）曙（素材詞）やう／＼白くなりゆく山ぎは、すこし

あかりて、紫だちたる雲の細くなびきたる（説明詞）——一

(3) 心情詞のみ添うたもの

○草は（題詞）葵（素材詞）いとをかし（心情詞）——五五—

(4) 素材詞 説明詞 心情詞を備へたもの

○山は（題詞）かたさり山こそ（素材詞）

雖に所をきけるにかと。（説明詞）をかしけれ（心情詞）——一一一

A類においても肝要な事は、題詞や素材詞が、心情には関係のない「山」や「橋」の如き非情物の羅列でありながら、その背後について清少の主情がこれを統一してゐることである。単に辞書的語彙的に物名を蒐集したものでないことである。たゞ「心情詞が現はれてゐなくても、心情作用が底流し、それによつて物名に血が通つてゐるのである。物名が実在、仮托、空想の何れでもよい、いな一見、無秩序に不羈奔放にならべられるほど、彼女の心情の躍るのが感ぜられる。（例文の下の漢数字は岩波文庫版の段を示す）

A類とB類の相異点は題詞にあるが、これも根本的には相似た性質を有し相互転換し得るものなることを述べよう。

A類の題詞

山は。峯は。春は。遊びは。修法は。主殿司こそ。

この構造は〔名詞十は(又ハこそ)〕である。名詞のうち最も多いものは、山、峯などの具体名詞であり。それ以外の作用名詞、抽象名詞(遊び、修法など)も少數である。これらの名詞は作者の思考の対象になるものを示す名詞であるから対象詞と呼ぶことにする。

A類題詞……〔対象詞十は(又ハこそ)〕
B類の題詞

すさまじきもの。にくきもの。ことことなるもの。こゝろゆくもの。たゆまるゝもの。

この構造は形容詞、形容動詞、又はその他の活用連語であって、
主体の心情を示す詞——これを私が心情詞と呼ぶことは前述の通り——にものの附加されたものである。

B類題詞……〔心情詞十もの〕

対象詞は主体(清少)の思考対象をあらはす詞であり、心情詞は主体(清少)の心情をあらはす詞である。然るに現に主体に或る心情(うつくし、にくしき等)を起させつゝある物は、とりもなほさず主体がその思考作用を及ぼつゝある物、対象である。

例へば、主体に「すさまじ」といふ心情を起させてある物——春の網代——は、主体が現に思考しつゝある物——思考対象——に外ならぬ。
すさまじ——心情詞
春の網代——すさまじき十物——対象詞
この関係から次の事が云へる。

心情詞十もの——対象詞

然るに、心情詞十もの——B類の題詞 である。故に

B類の題詞十は(又ハこそ)——A類の題詞

簡単と言へば、B類の題詞に「は」(又ハこそ)をつければ、A類の題詞となるのである。

A類とB類が構造上、また思考作用上、近しい関係にあることは之によつて明瞭であらう。私は論理をたゞ弄んでゐるわけではない。次にその実例を示す。

○世の中に猶いと心憂き物は(春曙抄本二三四。三卷本も同じ)

○かしこきものは(三卷本一八二)

○悪き物は(春曙抄本二四八)

○かうやあらむと見ゆるもの(三卷本二三二。見ゆるもの)

○見る物は(春曙抄本二二一、見ゆるもの)

(見ゆる見るなどは心情詞と言へないが、主体の作用を表す

もの、作用詞であるから、心情詞に準ずるものとして考へて

よいであらう。この他「降るもの」(二〇七)の例がある

が、降るは対象の属性であるから「降る物は」はA類本来のものである。この例ではない)

右の例は元來B類的な題詞であるものが、少し形式を変することによって容易にA類に転じたのである。「見ゆるもの」(三卷本)の如きは春曙抄本「見ゆるもの」とあって未だB類形式を保つてゐる。同一文章において、伝本によりA類・B類の両方に題詞形式の分かれることは、この両題の相互転換性を物語るものと云へよう。

要するにA・B・C・Dの四類が外形頗る相異してゐるにもかゝらず、一步反省すれば極めて類似の性格及び構造を有し、容易に相互転換し得ることを指摘したのである。次にその分類表を示すであらう。

枕草子形式分類表

類種														
詞対象														
a 心情														
b 情境														
c 語素														
d 語義														
e 心情														
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	○	○	○	○
/	/	/	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

○は該当項目の存在、
／ハ非存在ヲ示ス。

備考

例ヘバ A類第四種ノ文
章ニ於テハ題詞ハ対象
詞が使用サレ（心象詞
ヲ題詞ニ用キズ）、説

明ノ部分デハ素材詞ア
レド説明詞ナシ、心情
詞アリ、（例文、草は
a、萎c、いとをかし
e—五五—）

（一五）
3、淵は。かしこ淵。いかなる底の心を見えて、さる名をつけ
むと、いとをかし。

（一五）
4、草は。萎。いとをかし。

（五五）
5、五月五日は。曇りくらしたる。

（八）
6、修法は。仮眼真言などよみたてまつりたる。なまめかしうた
ふとし。

（一〇三）
7、すさまじきもの。除目に司得ぬ人の家。今年は必ずと聞きて
……（中略）……すさまじげなり。（二二）

8、縣がしきもの。暗う成てまだ火もともさぬ程に、ほか／＼よ
り人の来集りたる。（二二）

9、すさまじきもの。屋はゆる犬。（二二）

10、たゆまるゝもの。寺に久しく籠りたる。（二二）

11、すさまじきもの。家ゆすりて取りたる婿の来ずなりぬる。い
とすさまじ。

（この表は大部分の文例から帰納した類別であるが、未だ全部
のものに及ばない。従て仮定的域を出ない。全部に亘って検討
すれば、なほ四類十五種の何れにも属せず、中間的な存在を發
見するかもしけない。また枕草子の文章は事実の解釈は出来て
も、私の様に作者の底流する主情をとらへることを旨とする者
にとっては、如何にとらへるべきかに迷はねばならぬ場合が多
く、未だ疑問のものも相当存する。しかし比較的分明な類型と
いふ意味でいちおう四類十五種を掲げたのである。）
例1、海は。水うみ。（一六）（漢数字は岩波文庫版、春曙抄の段を示す
アラビア数字は分類表の種を示す）
2、淵は。ないりその淵。誰にいかなる人の教へしならむ。
（一五）
3、淵は。かしこ淵。いかなる底の心を見えて、さる名をつけ
むと、いとをかし。

（一五）
4、草は。萎。いとをかし。
（五五）
5、五月五日は。曇りくらしたる。
（八）
6、修法は。仮眼真言などよみたてまつりたる。なまめかしうた
ふとし。
（一〇三）
7、すさまじきもの。除目に司得ぬ人の家。今年は必ずと聞きて
……（中略）……すさまじげなり。（二二）
8、縣がしきもの。暗う成てまだ火もともさぬ程に、ほか／＼よ
り人の来集りたる。（二二）
9、すさまじきもの。屋はゆる犬。（二二）
10、たゆまるゝもの。寺に久しく籠りたる。（二二）
11、すさまじきもの。家ゆすりて取りたる婿の来ずなりぬる。い
とすさまじ。